

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	彭 宇潔
論文題目	An Anthropological Study on the Tattoo Practice among the Baka Hunter-Gatherers in Southeastern Cameroon（カメルーン東南部に暮らす狩猟採集民バカにおける刺青実践に関する人類学的研究）		
(論文内容の要旨)			
本論文は、カメルーン東南部に居住する狩猟採集民バカの、刺青を中心とする身体加工の実践を人類学的に分析したものである。 第1章ではまず、アルフレッド・クローバー、テレンス・ターナー、アルフレッド・ジェルらの業績を中心に、これまでの人類学における刺青研究のレビューがおこなわれる。それらの先行研究では、刺青のもつ象徴的・社会的意味が議論の中心となっている。しかし、彭氏が初めてバカの刺青に出会ったときのエピソードは、先行研究における刺青のイメージとはかけ離れたものであった。女性の顔にかなり無秩序に配置された癍痕様の刺青はそれほど美しく見えず、刺青の下書きを描いても「明日」と言いながらいつまでたっても実際の作業に入らない、といった様子だったのである。ここで生じた「バカたちにとって刺青とは何なのか」という問いが、本研究を貫く中心的な問題意識となっている。この問いに答えるために、彭氏は二つの研究方法を採用した。一つは広域調査であり、自動車道路沿いに点在するバカの集落を数百キロメートルにわたって踏査し、1000人以上のバカから当人の刺青についてのデータを集めた。もう一つは特定の集落に定住しての定点調査であり、そこで刺青に関わる実践をめぐる相互行為および会話についての詳細な記録をおこなった。 第2章では、刺青を含めたバカの身体加工の全体像が示された後、刺青の施術方法とその様式が紹介される。刺青の様式は、いくつかのごく単純なパターンの組み合わせであった。次いで、身体加工が性・年齢によってどのように異なっているかが分析され、実際に刺青を入れる場面の会話が記述される。その結果、刺青は圧倒的に女性に多く見られ、女性の成熟のイメージと重ねて捉えられる傾向があるが、しかしそこでは「入れられた刺青」よりも、それを「入れる」という実践行為そのものに高い価値がおかれていることが明らかになった。 第3章では、刺青を「彫る人」と「彫られる人」がどういう関係にあるのかが、親族関係、居住地域、社会組織の視点から分析されている。その結果、刺青のパターンはバカのリニージや居住地域、さらには隣接するバントゥー系民族とはほとんど関連しないことが明らかになった。また彼らの社会には専門的な「彫り師」もおらず、彫る人と彫られる人はほとんどの場合、近い親族関係にある。実際の施術場面を見ると、施術は何の前触れもなく始まり、また刺青のデザインは彫るプロセスにおいて、施術に立ち会っている人々の意見で次々と変わっていくことが明らかにされた。 第4章では、バカたちがどのように刺青をイメージし、記憶しているかが分析される。注目されたのは、バカの女性たちが、施術時およびその後において、自分の刺青を見るために鏡を使わないという現象である。また、体に残った刺青は、年寄りにおいてははっきりと認められなくなっていることも多いが、彼女たちは、それが「彫られた」ことは記憶していて			

も、実際に見えなくなっていることはほとんど意識していない。つまり、彼女らにとっての刺青は、他人に見せるためというよりは、それを一緒に入れ、他の人たちと同じようになるためにあるのだ、と分析されている。

第5章では、ここまでの分析が以下のようにまとめられる。

- 1) バカ社会における刺青実践は、社会的な共在がベースとなっており、たいしたきっかけもなく、臨機応変におこなわれる。
- 2) そこで志向されているのは、個人間やグループ間の境界を作ることではなく、身体の外見において他者と融合することである。
- 3) バカの美意識は、「今」への高い関心に基づいており、それは物理的外見ではなく、記憶の中に保存される。

このように、バカの刺青実践には彼らの「狩猟採集民性」とでも言うべき特徴が表出されており、それは彼らの社会の相互作用の中で、継続的に再生産されていると結論づけられている。

(論文審査の結果の要旨)

従来の狩猟採集民研究において、その興味はおもに人々の生業・生態や社会構造に向けられてきており、彼らの身体装飾や身体加工は（「シンプルである」という指摘はあったにせよ）周縁的な事項であったことは否めない。しかし本論文は、刺青実践の分析という視点から、カメルーンの狩猟採集民バカの人々の姿を新しい角度から描き出すことに成功している。

「刺青を入れる」ことは、かつての日本社会においては、さまざまな深刻な意味を持つ行為と捉えられてきた。「親からもらった体に…」というフレーズが示すように、それは「取り返しがつかない」行為であり、あえてそれをおこなうには、相当な覚悟と意味づけが必要だったのである。刺青の持つこういったイメージは、クローバー、ターナー、ジェルなどの仕事に代表される、人類学における刺青研究にも共通して見ることができる。すなわち、刺青はなにごとかの表象であり、社会的なアイデンティティ・地位・階層といった区別を示すために使われ、刺青を入れる人は特殊な技能を有する、等々である。

彭氏はバカ社会において、1000人以上のバカたちを対象とした広域調査と、一集落における長期の住み込み調査をおこなったが、そこから明らかになったのは、上記の「重い」刺青観の対極とも言うべき姿であった。まずその刺青の模様は、小さく単純なパターンの組み合わせであり、そこから何らかの象徴性を読み取ることは難しい。そもそもバカ社会には社会的階層はほとんど見られないのだが、その模様は持ち主の社会的地位、リネージ、同所的に住んでいるバントゥー系の民族集団の別とはほとんど相関しない（ただし、刺青を入れているのはほとんど女性であることは注記しておかねばならない）。施術は、刺青の特殊技能を持った人物がおこなうわけではなく、誰でも見よう見まねですることができる。すなわち刺青の施術は、気分が乗ったときに「なんとなく」、身近に居る人（とくに親族）が入れ始めるのである。また施術の現場において、模様のプランは、その場に居合わせた人々の議論に左右されて刻々と変わっていく。

施術後の刺青に関しても、やはり「重み」は感じられない。バカの女性たちに鏡を渡しても、彫られた刺青を見るためにそれを使うことはほとんどない。せっかく入れた刺青の上にまた施術を重ね、模様自体がよくわからなくなることも多い。年を取ると皮膚のたるみから刺青が見えなくなることがしばしばあるが、それは当人たちにほとんど意識されていない。

このような刺青は、バカたちにとってどのような意味を持っているのだろうか。彭氏は次のように分析する。ここまで述べてきたように、「すでに彫られてしまった」刺青は、彼女らにとってそれほど大きな意味を持っていない。大切なのは、それを「共にいる人々で彫る」という行為そのものなのである。このことは「行為としての刺青」と表現しうるだろう。

これまでの狩猟採集民研究においては、「平等主義」という言い方であらわされる社会の単純性、そして「現在（のみ）への関心」といった事柄が繰り返し議論されてきた。これらは生業や経済の領域だけではなく、刺青を含む身体加工という領域においてより鮮明

に現れることが、この研究によって明らかになった。生態や経済は人々の生存に直結し、いわば「淘汰圧」を受ける領域であると言えるが、身体加工は、女性の魅力を高めるということ以外は淘汰圧とはほとんど関係なく、いわば「自由な浮動」がおりうる領域だと言える。本研究の対象がそういった領域であるからこそ、狩猟採集民社会の対他的関係の実像をより鮮やかに描き出すことに成功していると考えられる。

以上のように本研究は、長期にわたるインテンシブなフィールドワークに基づき、狩猟採集民の身体加工という新たな領域を開拓した意欲的な研究であると評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年1月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。